様式1

令和7年度　山梨県立特別支援学校うぐいすの杜学園評価報告書（自己評価・学校関係者評価）

学校目標・経営方針	一人ひとりの心に寄り添った学習活動を通して、基礎的・基本的な知識や技能の定着を図り、自信をもって様々な事柄に意欲的に取り組む態度を養い、社会の中で主体的に生きていくために必要な「生きる力」を育む。

山梨県立特別支援学校うぐいすの杜学園校長　伊藤　太一

本年度の重点目標	
	基礎学力の定着と学ぶ楽しさを感じることのできる授業の実践
	様々な体験を通して、自分を大切にし、他を思いやる心を育む学習活動の充実
	プラザ内他機関を含めた関係機関との連携推進
	本校についての理解を深めていただくための取組の推進
	病弱教育に関する専門性の向上とセンター的機能の充実
	働き方に対する教職員個々の意識改革

達成度		
	A	ほぼ達成できた。（8割以上）
	B	概ね達成できた。（6割以上）
	C	不十分である。（4割以上）
	D	達成できなかった。（4割以下）

評価		
	4	良くできている。
	3	できている。
	2	あまりできていない。
	1	できていない。

自　己　評　価

本年度の重点目標				年度末評価（1月1日現在）		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	基礎学力の定着と学ぶ楽しさを感じることのできる授業の実践	「やまなしスタンダード」における授業づくりの視点を踏まえ、個別の教育支援計画や個別の指導計画に則った授業改善の取組	校内研究を基にしたPDCAサイクルの実施 デジタルとアナログを融合した授業の実施と改善	・本校の教育目標に沿って、個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づく授業改善を継続した。教科に応じて少人数指導や、学習状況に応じた小集団編成を取り入れ、児童生徒の習熟度・特性に合った学びを実現した。 ・各教科の学習内容確認表を整備し、学習状況の把握と引継ぎに活用することで、転籍後の追支援にもつながる仕組みを構築できた。 ・全職員で情報交換会を行い、児童生徒の状況や対応について確認するとともに管理職による授業観察と振り返りを通じて授業力の向上を図った。 ・これらの実践により、基礎的・基本的内容の定着に加え、児童生徒の「わかる」「できる」実感を伴う学習意欲の向上が確認できた。	A	・小集団編成の最適化：実施頻度・編成基準の再検討（学習課題／行動特性に応じた柔軟編成）により個別最適な学びを推進。 ・学習内容確認表の改善：項目の調整、評価の一貫性確保、教科横断的に参照できるビューの整備を進め、学習到達の見える化をさらに高める。 ・授業改善のサイクルの定着：教員間での情報交換及び授業振り返りを密に行い、授業改善のサイクルの定着を図る。
2	様々な体験を通して、自分を大切にし、他を思いやる心を育む学習活動の充実	小集団で他者と協力して行う活動や体験的な学習を通して協調性や社会性を育成	児童生徒の実態に合わせた小集団での活動や体験的な活動の計画と実施	・児童生徒の実態に合わせて、小集団での協同的活動や体験的学習を計画・実施した。 ・必要に応じて校外学習を取り入れ、他者との関わりを通して協調性・社会性の涵養を図った。 ・子ども心理治療センターとの打合せにより、特性に即した活動機会の設定が可能となり、安心できる場面での挑戦を積み重ねられた。 ・道徳教育を中心とする価値の吟味・振り返りを授業や学級活動に織り込むことで、自己理解・他者理解の深化につながった。	A	・体験活動の体系化：学期ごと・学年ごとにねらいと評価規準を明確化し、計画→実施→振り返りが連動するカリキュラム・マネジメントを強化。 ・他者理解の評価の見える化：活動後のリフレクションシートやルーブリックを用い、自己を大切にする態度や他者配慮の行動を継続的に評価・記録。 ・子ども心理治療センターとの協働：活動前後の情報共有を効率化し、活動の質保証を図る。
3	子どものこころサポートプラザ内他機関を含めた関係機関との連携推進	子ども心理治療センターとのよりよい連携	引き継ぎ書の作成、担当者会議など各種会議の見直しと充実、研修会を通した相互理解の促進	・個別懇談、授業参観、担当者会議等を通じ、保護者・関係機関との情報共有と支援の同調を進めた。 ・引継ぎ書の作成や各種会議の見直し、研修会による相互理解の促進、進学希望者への指導の充実等、個別支援では一定の前進が見られた。	B	・記録・情報共有の効率化：会議記録・申送り文書の共同作成（共同編集）や音声認識ツールの活用で記録作成の省力化を図る。 ・ケース会議の質向上：目標の明確化を行い、各機関における役割分担を相互に確認する。

学校関係者評価

実施日　（令和8年2月10日）

評価	意見・要望等
4	・日頃から児童生徒の特性を丁寧に把握し、一人ひとりに応じた小集団編成や教材・教具の工夫が行われていることがよく分かり、大変心強く感じている。学習内容確認表の改善やPDCAサイクルの定着など、授業改善に向けた継続的な取り組みが見られる点も評価したい。 ・一方で、教員間や関係機関間での支援方針の認識のずれが、時に児童への指導に影響を与える場合があるように感じられるため、共有した情報をどのように授業改善へつなげていくか、より踏み込んだ話し合いの場の設定を期待したい。 ・また、デジタル教材とアナログ教材の効果的な組み合わせを通して、児童生徒が「わかる・できる」感覚をより一層実感できる授業づくりをお願いしたい。ICT活用が児童の負担軽減や理解促進につながっている一方で、学びの過程を丁寧に振り返る活動も併せて充実させてほしい。 ・今後も、児童生徒一人ひとりの小さな成長を大切にしながら、学習意欲の向上につながる指導改善を継続されることを期待する。
4	・体験的な学習活動を通して、児童生徒が主体的に取り組む姿や、他者との関わりを通じて成長している様子が伝わってきた。特にうぐいす祭など大きな行事に向けて、子どもたちが自分の役割を理解し、達成感を味わう機会が設けられていることは大変意義深いと感じる。 ・一方で、活動前後の不安の高まりや環境の変化への負担が大きい児童もいるとのことで、心理的安全性を確保するための丁寧な事前説明や、活動後の振り返りの時間を十分に確保していただけるとより良いと感じた。また、体験のねらいが児童生徒や保護者にも分かりやすい形で示されることで、家庭との連携もさらに深まるように思う。 ・今後は、活動ごとの評価基準をより明確化し、児童が自分の変化や成長を実感できる仕組みづくりを期待したい。振り返り活動を通して「他者を思いやる行動ができたか」「協力して取り組めたか」などの視点が見える化されると、子どもたち自身の理解も深まると思われる。 ・これらの活動が子どもたちの自己肯定感の向上につながるよう、引き続き工夫ある取り組みをお願いしたい。
3	・子ども心理治療センターとの担当者会議や引継ぎ書の作成など、連携に向けた具体的な取り組みが進んでいることは非常に良いと感じる。会議記録の共同編集や情報共有の効率化など、実務面でも負担軽減につながる工夫が見られており評価したい。 ・一方で、共有された情報の解釈に違いが見られる場合があり、支援方針が十分に一致していないと感じられる場面があることも伺った。児童生徒にとって安心できる一貫した支援のためには、各機関の役割理解や価値観の違いを丁寧に確認し合うプロセスが必要ではないかと感じる。 ・特に、学習面と心理面の双方を捉えた支援が求められる場面も多いため、学園とセンター、さらには外部機関も含めた三者での協議の機会を定期的に設け、互いの専門性を尊重した話し合いが進むことを期待している。 ・今後も、単に情報を共有するだけでなく、共有した情報を「どのように児童の支援へつなぐか」まで話し合う場が増えることで、より実効性のある連携が進むと思われる。

4	本校についての理解を深めていただくための取組の推進	災害発生時の一時避難所としての役割の確認	一時避難所の運営に関する会議の開催、地元自治会との防災訓練の実施	・防災については、地元自治会及び甲府市役所担当者と一時避難所の運営に関する会議開催を行うことができ、個別の取組は進んだ。	A	・防災協働の定例化：地元自治会の防災担当者の変更を見据えた定期的な打合せの開催と役割の確認等をマニュアル化する。	4	・地域との連携を継続して進めている点は心強い。 ・今後は、避難所運営に関する情報共有の仕組みをより分かりやすく整理し、関係職員や地域住民が共通理解をもてる形に整備してほしい。 ・引き続き、定期的な協議や訓練の実施をお願いしたい。
		外部への積極的な情報発信	HPの更新、学校説明会と研修支援の実施、研修会等での本校の実践発表	・ホームページの更新を頻繁に行い、授業の様子や学校行事等について情報発信することができた。また、地域住民に「地域だより」を年3回発行した。 ・相談支援部主催の学校説明・見学会並びに学習会では60名の小中学校及び特別支援学校の教員が参加した。また、センター的機能の発揮による小中学校への研修支援、訪問支援等を実施した。		・広報のチャネル強化：HP更新運用、紙媒体（地域支援だより）の併用の継続に加え、作品展示等の発信機会の設定で双方向性を高める。 ・学習会の質と参加拡大：学校説明及び学習会で本校の強みが伝わるテーマ設計を行い、参加促進を図る。		・ホームページ更新や地域だよりの発行など、学校の様子が分かりやすく発信されている点を評価したい。 ・今後は、発信内容の双方向性を高め、地域や関係機関との交流がさらに深まる仕組みづくりを望む。また、学習会や説明会で本校の特色がより伝わる工夫を期待する。
5	病弱教育に関する専門性の向上とセンター的機能の充実	本校教職員に対する病弱教育、児童生徒理解、ICT活用等、専門性向上に関するの研修会の実施及び情報提供	各種研修会の計画的な実施とやまなし教員等育成指標の各ステージに応じた研修の受講促進	・病弱教育・児童生徒理解・情報活用等に関する計画的な研究・研修を実施し、やまなし教員等育成指標のステージに応じた受講促進を図った。 ・最新の知見や参考文献の紹介、教員用図書の整備を順次進め、センター的機能（相談・研修支援・情報提供）の充実に資した。引継ぎの丁寧な実施や関係機関との連携強化により、一体的支援を推進できた。	A	・研究テーマの絞り込みと成果共有：病弱教育の重点課題（例：長期欠席・不安症状への学習環境調整）に絞った研究を設定し、校内外に成果発信。	4	・病弱教育に関する専門性向上を目指した研究テーマの絞り込みや、校内外での研修機会の確保など、計画的に学びを深めている点は非常に心強いものである。特に、長期欠席や不安傾向の強い児童に対する学習環境調整の研究は、現場の課題に即した有意義な取り組みだと感じる。 ・また、成果の共有やデータの蓄積が進んでいる点も評価したいが、関係機関との協働の中で、こうした成果をより広く共有していく仕組みが整うことで、地域全体の教育力向上に寄与すると思われる。参加できなかった教職員のための研修記録や資料保存の仕組みもあると、学園全体の専門性保持に役立つだろう。 ・さらに、児童生徒理解に関する最新の知見を取り入れ続けるため、学外研修や外部専門家との交流機会を今後も確保し、センター的機能としての役割を発揮していくことを期待したい。
6	働き方に対する教職員個々の意識改革	会議、業務等の効率化の推進	校務支援システムを活用した業務の効率化　業務分担の平準化	・会議の事前資料配布、議題・連絡事項の精選、校務支援システムの活用等により、業務の効率化を進めた。 ・出退勤記録による在校時間の管理では、月平均30時間以内の時間外在校を維持。 ・教育データの効果的利活用を進め、教員間の情報共有が円滑化した。	B	・会議の効率化：会議の目的・成果を事前定義し、決定事項と保留事項の整理をすることで時間短縮を図る。 ・ドキュメント標準化：申送り文書や会議記録のテンプレート統一と共同編集で、作成・修正の手間を削減。	3	・会議の効率化や文書のテンプレート化、校務支援システムの活用など、働き方改革に向けた取り組みが着実に進んでいることを評価したい。出退勤データを活用した在校時間管理も適切に行われている点は、安心して教育活動に取り組む環境づくりにつながっていると感じる。 ・一方で、児童数の増加により、授業準備や個別支援にかける時間が確保しにくいという課題も見られる。業務量の偏りを防ぎながら質を維持するためには、更なる役割分担の見直しや、若手教員への育成支援の強化も必要と感じられる。 ・また、関係機関との調整業務が増加し、連携の質と効率の両立が求められている現状を踏まえると、情報共有ツールの活用や会議の目的明確化など、より戦略的な業務改善が求められる。 ・今後も、教職員が健康的に働き続けながら、児童生徒に質の高い教育を提供できる環境整備を期待する。

留意点　（1）重点目標と評価項目については，各学校の現状と課題に基づき，実情に合わせて重点化し，設定する。
（2）学校関係者評価については，年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的対策を説明し，評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは，最終回の学校評価委員会等を開催し，学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。